

ゴールドファイル



四十年間の東京生活にピリオドを打って、鹿児島島の入来に戻って一年余りが過ぎた。久し振りに外出することになって、バッグを選んだ。シヨルダの類は洋服掛けに吊るしてある。今回はまだ夏の白でよいことにしてふと見ると、茶のバッグにすっかり黴が生えている。しまったと思っただけもうバスの時刻である。とりあえず手近にあったタオルでざっと拭いて机の上に置いて外に出た。

翌朝、日課の新聞を読み終えると早速バッグの磨きにかかった。柔らかに艶やかなめし革なのだが、提げ紐や底の部分はやや擦り切れて色が落ちてきている。引出しをゴソゴソかき回して新品の無色のチューブ入りの保革油を見つけ出した。七、八年前に買った茶の液状のもあった筈だが引越の際持って来たかどうかあちこち探して薬品の棚の中にそれも見つけた。

布で黴を落とし、スポンジで保革油をまんべんなく塗った。このバッグにはこんな作業を何遍繰り返したことだろう。それはこれには特別の愛着があるからである。

一九八三年の秋、私はデュッセルドルフに行った。

F銀行ドイツ支店長夫人となった今井裕子さんに電話したことがきっかけとなった。着任のお知らせの絵はがきを頂いたのは半年も前だったのに、通勤と家事に振り回されていた私は、すっかりご無沙汰していたのだ。夫の帰宅を待っていた夜十一時頃、ふとどうしていらっしやるかと思っただけ。今ドイツは何時頃だろう、この時間だったら大丈夫かもしれないなと思っただけで、初めての国際電話を申し込んで、絵はがきに書かれた数字を読み上げたのだ。一寸お声が聞きたいなと思っただけだったが、別れ際の「こちらにいらっしやるってお電話かと思いましたわ。」

との彼女の言葉にはと胸を衝かれた。

たしかに絵はがきには、「庭にはリスも来る映画に出るような大きな」社宅だから見にきてほしいと

は書かれていた。しかし海外旅行など未だ一般的ではなかった当時のことである。国外には一步も出たことのない私は、実際に行くなどは夢にも思っていないが、しかしきつと異郷の地で淋しい思いをされているに違いないと思うと、何か裏切ったような後ろめたい思いが湧いてきた。そしてこれはどうしても行かなければと決心したのだった。

前年、長男と長女の二組の結婚式を済ませた上、まだまだ学費のかかる三人の子が残っている。経済的にはそんなゆとりはとてもなかった。しかし、四、五年程前に社費でヨーロッパ一周をしてきた夫が、

「互助会から五十万円借りてやるから行って来なさい。」

と云ってくれた。私の会社の仕事もなんとかやり繰りして一週間の休暇を捻り出し、遂に夢は実現したのだった。

デュッセルドルフでの心温まる歓待は、私の生涯の宝物のようなときである。支店長夫人として公私ともども忙しい筈の彼女が、殆どの時間を私のために使ってくれた。

初日は日曜日のこととて今井支店長の運転で、ワールローの戦跡を訪れた後、ブラッセルに連れて行って頂いた。またよく晴れた日、二人で一等の国際列車に乗ってアムステルダムに行き、アンネ・フランクの家やレンブランドの家を見て、夕日の中を運河巡りの船にも乗った。夜は夜で、支店長の切符でオーケストラにも行ったし、ナポレオンが食事をしたと云うパブでビールを御馳走になったりもした。また支店長が、きちんと汽車や船の時刻を調べておいて下さって、朝からライン下り、ボンのベーター・ベンの生家、ケルンのドームなど、とんとんと巡った日もあった。どれも忘れられない思い出である。

帰りはハイデルベルグ観光の後、フランクフルトのホテルに二人で泊まった。残金が三百マルクほどあった。

「これで買える範囲で、琥珀のイヤリングとバッグを買ってちょうだい。」

とこの田舎者は勝手なお願いをしてフランクフルト空港で別れたのだった。

何日かの後、ドイツから小包が届いた。中には茶色

のバッグと琥珀のイアリング、それに夫のためにと琥珀のカフスボタンも入っていた。そのバッグがかの有名なゴールドファイル（金の矢）の製品で、止め金がマグネット一つのシンプルなこのバッグなのである。

保革油をタオルで拭つて、艶出しの液を塗った。キユッキユツと磨くと艶やかさが戻ってくる。新品のようにはいかないが、これはこれで使い込んだよさがあ

る。バッグを眺めていると、今井さんには昨年多摩湖畔の料亭で送別の御馳走もして頂いたことを思い出した。ご主人は〇電気の専務さんとして現在も活躍中のお人である。いつの日か無事お勤めを終えられて、お二人でこの「歴史と温泉の町」入来にゆっくりと出掛けてきてほしいものである。

そつそつ、出来たばかりの多摩平の団地に住んでいた若い頃、お互い夫が同年に入社したこともあって二人のお給料の明細を見比べたりしたこともあった。一流銀行と二流擔保ではあの頃から相当な差があった。

家事全般に要領の悪い私は、今井さんのときぱぎと

整理された部屋や手際よい料理を感服というよりは羨望の目で眺めていた。

ある年の正月、夫が今井さん宅で飲みすぎて、ご主人に背負われて帰つて来たこともあった。あの頃は夫も五十キロそこそこのスマートさだった。一方今井さんはがっしりとして、眼光鋭く維新の志士のよつな風貌だった。

そんな昔語りをゆっくり出来る日が本当に待ち遠しいと、取締役という現役派にちよっぴり羨望の念をこめて思つのである。

（平成7年9月）